
シンポジウム 5

尿路結石におけるそもそまとまとう

司 会	藤 本 直 浩 (産業医大)
	井 川 掌 (久留米大)
演 者	坂 本 信 一 (千 葉 大)
	松 尾 光 哲 (久留米大)
	岩 本 秀 安 (野崎東病院)
	松 本 正 広 (産業医大)
	柑 本 康 夫 (和歌山県立医大)

司会のことば

尿路結石症は泌尿器科の代表的な Common Disease であるがゆえに、その診断と治療に対しては泌尿器科医一人一人の解釈とポリシーがあるのではないだろうか。本シンポジウムでは総会テーマの「そもそまとまとう」から考えて、やや盛沢山ではあったが5つのCQを設定させていただいた。いずれも具体的なCAをひねり出すことがなかなか困難なお題であり、演者の先生方には大変ご苦勞をおかけしたのではないと思う。しかし、いずれのCQにもいろんな角度から切り込んでいただき、今後の課題も含めてかなり明確にできたのではないかと考えている。

1. 坂本信一先生からは「5~10 mmの尿管結石の治療法は」をテーマに3つの戦略、すなわちMET, ESWL, TULそれぞれの望ましい適応について実臨床データを含めてお示しいただいた。症状の有無, CT値, 体格, 結石成分などいくつかの因子である程度治療法の選択が可能であることが明確になったのではないと思う。

2. 松尾光哲先生からは「無症候性腎結石の治療は」という日頃我々も遭遇することの少ない少々頭の痛いテーマについて、既報告のレビューを通じて問題点と考え方を解説いただいた。下腎杯結石かどうか、過去の治療歴の有無, メタボリック症候群の有無が治療介入判断に重要な因子であることが示された。

3. 岩本秀安先生からは「TAP/ECIRSは最終手段か」

をテーマにサンゴ状結石のような治療に難渋する結石に対する最も有用な手術法について自施設の豊富な症例経験から解説をいただいた。適切な腎瘻穿刺が成功の鍵であり、機材や人材などのハード面が揃えば現時点では最終手段と言ってもよいと結論された。レーザー機能などさらなる進化が望まれる。

4. 松本正広先生からは「腎盂腎炎併発例のマネージメント」をテーマに講演いただいた。結石性尿路感染症は一定の頻度で生じる避けられない併存病態であり、症例の高齢化も合わさって近年はむしろ増加傾向にある。ドレナージの必要性や感染重症化のリスク因子について自施設データからひも解き、適切な抗菌薬投与やドレナージ実施の必要性が改めて浮き彫りになった。

5. 柑本康夫先生からは、これまた頭の痛いテーマである「再発予防はどのように」という視点から講演いただいた。アンケートでは患者側は意外に高い再発予防への希望を持っていることから医療者側も再発予防のさらなる理解と実践が必要であることを示していただいた。

現在尿路結石症ガイドラインが改訂作業中であり、今回取り上げたテーマに関しても新たなCQ/CAが提示されるものと期待される。尿路結石症は良性的の病態ではあるが、経過が長期で、かつ全身病態とも深く関連していることから泌尿器科医にはトータルマネージメント力が求められる。臨床イナーシャに陥らないように今回のシンポジウムの情報を会員の皆様の診療にお役立ていただければ司会としても望外の喜びである。